

ゆっくり、ゆったりした暮らしへ

－自然回帰型生活のすすめ－

寺崎 太二郎（都市エネルギー研究所）

1. 炭酸ガス排出削減が地球温暖化に対する真の答えだろうか？

地球温暖化の主たる原因として大気中の炭酸ガス濃度の上昇が挙げられているが、本当にそうなのだろうか。全く関係ないと言い切ることはできないであろうが、長期的視野に立って地球の過去の氷河期・温暖期の繰り返しについて見てみると、大気組成の変化以外にも重要な事象、例えば地球上の大陸の配置、ミランコヴィッチ・サイクルとして知られる地球の周回軌道要素、等の事象と相関があることが指摘されている。地球温暖化の主たる原因は何か、未だ特定されていないのである。

炭酸ガスによる地球温暖化は、純粋に科学的視点から取り上げられた問題というより、政治的、経済的な経緯があって問題視されるようになったと見る方が現実に近い。「後悔しない対策（ノーリグレットポリシー）」論が幅を利かせており、正面切った反論を抑制している状況がある。炭酸ガスの排出量を抑制するために化石エネルギー資源の消費を抑えること自体は、永き将来にわたるエネルギー資源の確保を考える上で、非常に大切なことではある。しかし、地球温暖化抑制のために、というのは非常に幅の狭い考え方ではないだろうか。

2. 有限の化石エネルギー資源

化石エネルギー資源の量は、石油、天然ガスを使い切った後、石炭を使うにしてもせいぜい数百年持つかどうかといったレベルの話である。今後一万年、いや十万年の人類のことを考えた場合、これは全くとるに足らない量であることは、明白である。石油や天然ガスによる、ここ100年の対処をいくら考えても我々人類にとって永遠の解決となることはない。何代にもわたる子孫がいつまでも暮らしてゆけるエネルギーが必要なのである。そのようなことが、有限の化石エネルギー資源で可能であろうか。地球温暖化問題の有無に関わらず、化石エネルギー消費量の削減は人が生き延びるために避けて通れない課題なのである。そして究極的には、循環利用できる再生可能エネルギーに依存して生き長らえる途しかないといって良い。

私たちはいつの間にか贅沢になりすぎた。経済先進国では過剰なまでに美しく、装飾的な装い、栄養過多となる位に溢れる豊富な食物、快適に空調された住居等の恵まれた環境の中で人々は暮らしている。原始的時代に遡るまでもなく、100年前と比較しても、その豊かさや便利さは驚異的なレベルにまで高まっているのではないだろうか。自然のバランスが崩れかねないような暮らしぶりをこのまま続けてよいのか、一度、省みても良いと思う。今、私たちは、自然環境が許容する範囲内で暮らすことを強く求められているような気がする。自然の不可逆な変化を強要するまでの消費的な暮らし振りを改め、地球上の様々な生物との共生をめざさなければならない。少なくとも経済先進国における今の生活水準は高く、衣食住いずれにおいても無駄な機能・要素を有するモノが溢れているのではないだろうか。

私たちが、これから大切にしていかなければならないことは、「ものによる充足」ではなく「こころの充足」であり、このような暮らしの価値観を変えなければならない。

3. いずれ制約が生じる

今後、大量消費による化石エネルギー資源の減少とともに、行動することに伴うコストが次第に高くなり、結果として人の行動に制約が生じるようになるということが予想される。そこでは空間的移動がしにくく、人との直接的なコミュニケーションの困難さが増し、何をしても時間がかかり、行動範囲が狭まり、という状況が生じる。長い目で見れば避けがたい変化である。このような事態に至った時、私達にとって大切になるのは、足るを知るということであろう。

生活に必須なもの以外の、過剰性能を有するモノ、即ち趣味や娯楽の対象となるようなモノを手に入れたり、利用しようとするとは非常に高くつく、従って公共的なサービスで足るものはそれらを利用する、例えば、自家用車が少なくなり、バスや鉄道の利用が再び増え、さらに歩ける所へは歩き、ちょっとした所へは自転車で、という社会へ移行して行くのではないか。ムリ・ムダ・ムラを省き、質素を尊ぶ社会へと姿を変えるのである。社会は地方分散的となり、多様な文化が地球の各地域に栄える、という状況が生まれる。あたかも昔のような世界が再現されたかに見える。

しかし全てが普通りなのではない。例えば、必要な地球規模のコミュニケーション手段は、最新技術を用いたものが公共的なレベルで用意されており、国連、赤十字、等の国際的に必要な諸活動は今までどおり維持される。重要な事は、万事がゆっくりと進み、私たちはゆったりと暮らす社会になっていることである。

このような変化は、足るを知るといふ心が欠けていては、自然に生じる事は無い。争いごとに明け暮れて来た私達の歴史を想うと、化石エネルギー資源が逼迫し、私たちがニッチもサッチも行かなくなって、初めて、半ば強制的に起こる変化ではないかという危惧の念も抱いているが。

4. ムリ・ムダ・ムラを省いたシンプルな暮らし

一般的にエネルギーを消費する人工的なものはいずれ衰退せざるを得ないので、必然的に手作りものが重用され、自然なものが大切にされる、人も自ら汗を流して事を成す、ということに価値を見出すようになるのではないだろうか。

速く、遠く、高くといったスポーツ的な快感や、効率が最優先されるビジネス的な感覚、もさることながら、ゆっくり、ゆったりした風情が見直される、そのような暮らしへ回帰するのである。例えば、音楽を楽しむにしても、電子楽器を駆使した大掛かりなミュージックとともに、昔ながらの楽器による演奏、聴くだけではなく、自ら爪弾いて楽しむという、小規模な楽しみ方も増えてゆく。長い目で私たちの将来を眺めると、このようなゆっくり、ゆったりとした暮らしぶりが目に浮かぶ。

結局、炭酸ガス削減は、地球温暖化問題の解決のために必要なのではなく、私達が地球上で生き長らえるためにこそ必要な条件なのであり、しかも、これが十分条件ではないということ、私達自らが変わって行かなければならないという事に深く思いを致すべきであると考えます。